ＮＰＯ　ＮＯＩＲ　報告書

熊篠慶彦とゆかいななかまたち
おっぱいをさがして７０００マイル・身体障害者の性について　北米編

イトウチアキ（理学療法士）

半分ノンフィクション、半分フィクション。一部記憶違いで脚色済み。

旅程

２０１５年１０月４日　日本出発
２０１５年１０月５日　サンフランシスコ着　宮崎光代監督と合流
シェリル・コーエン・グリーン氏　インタビュー
レイフ・エリック・ビックス氏　インタビュー
２０１５年１０月６日　サンフランシスコ発
シカゴ着・発
トロント着
２０１５年１０月７日　トロント　Come as you are Co-operative
ジャック・ラモン氏　インタビュー
２０１５年１０月８日　トロント発
ニューヨーク着
２０１５年１０月９日　ダニエル・シェイパック氏　インタビュー
２０１５年１０月１０日　ニューヨーク　セックス博物館
２０１５年１０月１１日　ニューヨーク発
２０１５年１０月１２日　日本着
時差あり。

目次

第一章　人物紹介
第二章　くましのよしひこの不思議なご縁
第三章　ナリタ・シュッコク・トラブル
第四章　メリケンサックは持ち込めない
第五章　護送中（拘束衣）のクマシノヨシヒコ
第六章　車椅子が悪目立ちしない国
第七章　セクシャル・サロゲート・パートナーのシェリル氏
第八章　脊髄損傷のエリック博士
第九章　閑話：市バスを追いかけツーブロック
第十章　優しい嘘
第十一章　トロントの中心で爆走する
第十二章　ありのままの君できて
第十三章　闘うお姫さま
第十四章　さよならニューヨーク、そしてやっぱり最後までトラブル

一．人物紹介

熊篠さん：熊篠慶彦：ＮＰＯノアール理事長。赤いデコトラならぬ、デコ車椅子で色々な所に出没する。障害者の性活動についての活動を行っており、男性用のマスターベーション自助具や障害を持った女性用の生理用品の取り替え方など、医療関係者があまり着目しない領域のサポートを行っている。ポイントはＡＶ出演歴があるところで、脳性麻痺というのは彼のパーソナリティを表す上ではオマケみたいなもの。

辻元くん：野良ヘルパー。依頼は要相談。柔道初段、飛行機や新幹線を含む移動の介助ＯＫ。身体障害者用の部屋じゃなくても臨機応変に対応できる能力あり。日本語・関西弁・英会話可。その辺の理学療法士や作業療法士より、知識と実体験がある。一見優しいふりして多分サド。

みっちゃん：宮崎光代：映画監督 Hikari として活動中。ショートフィルム”艶子 Tsuyako”にて海外の賞を総ナメ。最近では”Where we begin”で色んな賞をまた総ナメにした。日本では、スバルやレクサスなどのコマーシャルも手がける。経歴がすごいのに、会うとやっぱり関西人。英語で話していても、やはりどこか関西人。

イトウチアキ：理学療法士という、温熱とか電気とかを操るらしい職業についている以外、特にこれといった特色が無い人間。行き当たりばったりで、享楽的。特技は、徒歩５分の距離で３０分は迷子になる。東北ブロック代表。

二．くましのよしひこの不思議なご縁

２０１５年１０月４日。石川さゆりの歌と逆パターンで青森県発の夜行バスで上野に上京し、上野駅で時間を潰しながら、私は熊篠さんとその介助者を待っていた。本当は成田空港で待ち合わせをする予定だったのだが、何せこの女は筋金入りの方向音痴だったために、空港まで辿り着けない可能性がすこぶる高かった。私、もといイトウチアキは何度も、『大丈夫、空港まで一人で行ける』と主張したのだが、迷子になるであろう不安を拭えない熊篠さんに押し切られる形で、上野駅で合流することになったのだ。

もうすぐ三十路の女を捕まえて、信用できないとはなんたる侮辱だ。
熊篠さんに今回の旅に誘われた時、いつもの如く二つ返事で旅の帯同を決めた私は、アメリカに関する知識なんて一切持ち合わせていなかった。上野駅の本屋で美味しそうなハンバーガーとステーキ屋のガイドブックを読みながらアメリカに関する知識を補填していた時、『そろそろ着きます』とメールが入る。しばらくすると、真っ赤な電動車椅子の後ろに沢山の荷物を提げた熊篠さんが現れ、さらに後ろには、旅慣れした服装のデイパッカーが一人居て、それが辻元くんだった。
今回の旅は障害者の性活動について活動している人たちを取材する、取材旅行らしい。らしいというのは、熊篠さんから今回の旅に『ついてくる？』と聞かれたときに、内容を確認もせずに一つ返事で『うん』と返事をしたからだ。
旅のメンバーは、自身が脳性麻痺で身体障害者についての性活動の支援を行う、ＮＰＯ法人ＮＯＩＲの理事長である熊篠慶彦、鉄腕野良ヘルパーの辻元くん、何の為についてきたのか良く解っていない理学療法士の私、そして通訳と撮影を行ってくれる宮崎光代映画監督の４名である。
旅行のスケジュールは成田からサンフランシスコへのフライトの後、バークレイで映画『セッションズ』のヒロインのモデルになったシェリル・Ｔ・コーエン・グリーン氏に会い、その後脊髄損傷を持ちながら身体障害者の性についての支援活動を行うエリック博士への取材。次の日には、カナダのトロントに飛び、アダルト・ショップを経営するジャック・ラモン氏への取材。さらにＮＹに行き、２０１５年度のミス・ウィールチェアー・ＮＹでもあり、多発性硬化症を持ちながら女性のセクシュアリティと身体障害に関する活動を行うダニエル氏に会う。ついでに、セックス博物館を観光してくるという日程である。
言葉で聞いていればなんとかなりそうな旅程だったが、電動車椅子の人間を連れた国際線のフライトや移動、宿泊がいかに大変なものかを、この時の私はまだ理解していなかった。

三. ナリタ・シュッコク・トラブル

日本の車椅子ユーザーが街に出る時の障害は、健常者には問題ないレベルの歩道の凸凹（往々にして車道は走り易いが、歩道は最悪）や、電車やバスなどの交通機関の乗降、利用時間帯が限定されていて自由が利かない介護タクシー、カップルに使用されて利用できない多目的トイレ、あとは悪天候じゃないのかと思っていた。

上野から成田まで、駅員にいちいち乗降駅と時間を伝え、電車とホームの間にスロープを設置して貰わないと乗降できないのは、いつものこと。乗った電車の中で車椅子専用の駐車スペースがなくて、肩身が狭い思いをするのも日本ではいつものことだ。アメリカに行ったらIn & Outのハンバーガーが食べたいとか、分厚いステーキが食べたいとか、そんな雑談をしながら揺れる電車に乗って成田へ向かった。

成田空港についたのは、フライトの6時間以上前で、随分と早い到着となる。

「俺、こんなに早く空港に向かったことが、今までの人生の中で一度もないですよ」

と辻元くんが言うと、

「そんなに早くもないし、用心するに越したことはない。車椅子の旅はトラブルばっかりなんだ」

と熊篠さんが言う。成田空港について早々、することもないのでとりあえず荷物を預けようという話になる。

障害者帯同で飛行機に乗る時、連れに障害者が居るとは通常のカウンターではなく、別枠での優先搭乗が可能になることが多い。優先搭乗ではなく、手荷物を預けるところまでは普通に進み、いざ電動車椅子を預けようという段階で、熊篠さんの言う通りに早速問題が生じた。

「お客様、大変申し訳ないのですが、こちらの車椅子の搭乗についての事前連絡がなされておりません…」

と、申し訳なさそうに受付のお姉さんが言う。

電動車椅子は荷物として預ける際、事前に車椅子のサイズや種類を航空

会社に伝達していなければならないのだが、事前連絡がうまくいかなかったようだ。
「え、していたけどなぁ。旅行業社に、事前にサイズから何から聞かれて、書類届いているはずだけど」
と熊篠さんが言う。
どこかで連絡ミスが生じたのであろう。幸い時間が余るほどあったので、航空会社の人が調整してくれることになったのだが、車椅子のバッテリーの種類を聞かれるところからチェックが始まった。
普通型車椅子は問題ないのだが、電動車椅子を荷物として持ち込む場合、発火したり、貨物庫で電気が入って動いたりするトラブルを防ぐために、バッテリーは絶縁してから持ち込みをしなければならないらしい。
早速、バッテリーを取りはずそうと、熊篠車の後方にあるバッテリーカバーを外したあと、私と辻元くんの二人はバッテリーを動かして固まった。なんとバッテリーが外れないのである。
「熊篠さん！外れませんよ！これ！」
「蓋は開くけど外れへんなぁ…」
と熊篠車の後方で私と辻元くんが押しても引いても上げても下げても駄目なバッテリーに慌て始める。車椅子に乗っている張本人は、
「おかしいなぁ。（車椅子の修理をする業者の）社長、いつもバッテリー取り外してるんだけどなぁ…」
と言い、
「あ。大丈夫、取説あるよ。トリセッ。取って頂戴、辻元くん」
と軽い調子で辻元くんに取り扱い説明書を出させる。

だが、軽い調子で取り出した取扱説明書は、何十ページもあろうかという厚さで、しかも全文英語表記だった。
『今、この厚さを読めとな！』と心の中で突っ込みながら、取説を解読し始める私、横でバッテリーを押したり引いたりしている辻元くん。うんともすんとも言わないバッテリーをいじり続け、気付けば成田に着いてから、一時間以上が経過していた。

どうやってもバッテリーが外れないということを、空港職員も私達も察し始めた頃、私達の周りには受付のお姉さん二人とその部門の偉い人、さらにその上司という人だかりができていた。

こうなれば、もう仕方ない。バッテリーが外れないけど乗せてください！車椅子なので許してください！と足元をみるしかないと察した我々は、バッテリーが外れないけど乗せてくれませんか作戦を決行した。

「航空機の保安上それはちょっと…」

「電動車椅子を持っていかないということはできませんか？」

と口を濁しはじめる航空職員達の前で、

「電動車椅子がないとなぁ。手動で押して貰うのは手間だし」

と畳み掛ける熊篠さん。

「お願いします！ 車椅子がないと十日近くの旅程が大変になるんです。ああ、どうしよう…」

と私。

「バッテリー外れなくても、主電源スイッチが入らなければ車椅子は動かないんです！ ここ押さなければ大丈夫です！ スイッチが入らないように保護するカバーもあるんです」

と、辻元くん。

今考えると、初対面の割に息が合っている連携プレイである。
さらに交渉して粘ったのち、クレーマーに近い我々の押しに相手も若干面倒臭くなってきたのだろう。
「アメリカの本部に問い合わせてみます」
と、偉い人が言ってくださり、本部に問い合わせた結果、電源スイッチを入らないようにしっかりカバーする、ブレーキをしっかりかけて固定するというという特別措置で乗せてくれることになった。
スイッチをしっかりカバーすることで搭乗を許すということが決まった瞬間、
「こういうこともあろうかとね。昨日、夜な夜な電源カバーを作っておいたんだ。辻元くん、アレ出して。アレ。」
と、得意気に熊篠さんが辻元くんに何かを取り出させる。電源をしっかりカバーするのだから、それはしっかりしたカバー装置なのだろうと私がした予測を裏切って、辻元が取り出したそれは、”Do not touch（さわらないで）”と赤マジックで書かれたヨレヨレの段ボールだった。

「いやー、くましのさん。昨日作っておいてよかったですねー」
「ほんとにね」
と、満足気に会話する男二人の横で、果たして、このかぶせるだけのヨレヨレ段ボールでスイッチをしっかりとカバーができるのだろうか。アメリカ本土の厳しい乗り継ぎをクリアできるのだろうかと思ったのは、私だけではあるまい。
満足気に会話する男二人と、明らかに不安気な顔をしてカバーをさらに

補強しはじめる空港職員の横で、この旅が波乱万丈になる予測はなんとなくできてしまった。

出国手続きを始めてから既に2時間以上が経過しており、今までの人生で、一番長くかかった荷物預けになった。

四. メリケンサックは持ち込めない

搭乗手続きをするだけで2時間近くが経過し、想像していた以上に車椅子、特に電動車椅子のチェックインが面倒くさいものだと知った。

熊篠さんがトラブルを予想していたこともあり、フライトまでかなり余裕があったので、日本最後の食事は蕎麦にした。私はアメリカに行ってから、一杯千円もするような味噌汁なんて飲みたくないので、スーツケースの底にレンジでチンするご飯とインスタント味噌汁を忍ばせている。誰かがアメリカで、「和食が食べたい」と言い出したら、一杯８００円でインスタント味噌汁を売ってやろうという魂胆である。さすが私、賢い、商売上手。

食後に機内持ち込みの手荷物チェックを行い、機内に乗り込む直前で手動の車椅子に乗り換える予定になっている。お腹もいっぱいになったことだし、そろそろ保安検査を通過しよう、と三人で保安検査場に向かっていく。

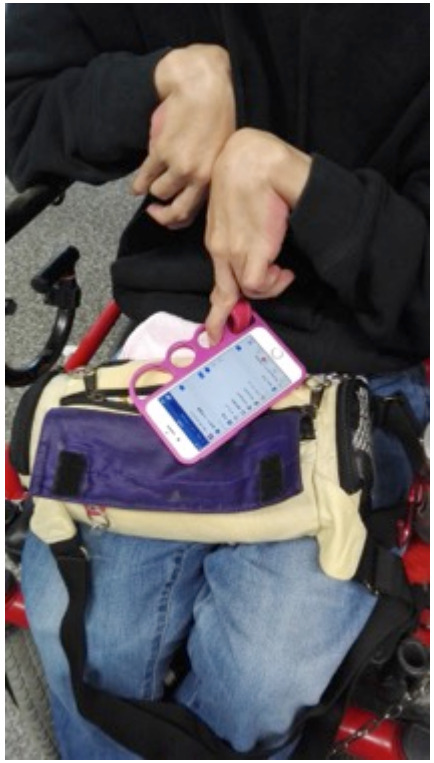
保安検査場では、携帯電話や貴金属類をボックスに入れて流れ作業の中で身体検査をされる。私達のような歩ける人間は問題なく検査場を通過するけれども、熊篠さんの場合は電動車椅子なので、全てがピーピー鳴りっぱなしでチェックに時間がかかるのである。先に検査場を通過した私と辻本くんが三人分の手荷物を受け取っていたら、

「お客様、非常に申し訳ないのですが…」

と、職員が非常に申し訳そうな顔で近づいて来る。

「お客様、こちらの携帯電話のカバーが、メリケンサックの形になっておりまして…。メリケンサックのような危険物は、機内へ手荷物として持ち込むことができません。取り外して捨てるか、機内持込み以外の荷物として預けることは可能でしょうか。」

と、聞いてくる。



熊篠さんは脳性麻痺という生まれもった特性がある。脳性麻痺[1]とは、リハビリテーション医学辞典によると、『受胎から新生児（生後四週以内）までの間に生じた脳の日進行性病変に基づく永続的な、しかし病傷としては変化しうる運動及び姿勢の異常』とある。

彼は、歳を経る毎に上肢の、特に肘と手関節、手指の可動範囲が低下している。生活環境の調整や、ある程度の身体サポートは必要とするが、大抵のことは一人でできるので、社会保障制度を利用しながら一人で暮している。食事などもこの手で器用に箸を持ち、食べることができるが、関節の可動範囲が狭いので、手を伸ばしてリーチができる範囲が狭い。指の動く範囲にも制限があるので、携帯電話のような平坦な物体を持つことが難しい。

今、保安検査場で問題になっているメリケンサック型の携帯ケースは、熊篠さんのような手指の可動域制限がある人間には良い自助具*1になるのだ。メリケンサック型携帯ケースの穴の部分に指をうまく引っ掛けて、スマートフォンを操作する。

保安検査を終えた熊篠さんが、

「うっわ。携帯ケースは盲点だった。そうか、確かにメリケンサックの形だった。これじゃないと携帯持てないんだけどな。あーダメなのかー」

と言い、私が熊篠さんの手の機能障害とメリケンサックの形でなければいけない理由を専門職っぽく説明してみたのだが、規則はやっぱり規則らしく駄目だった。

仕方がないのでメリケンサック型携帯ケースは、受付で再度荷物預かりとなる。次のフライトの時では、手荷物として持ち込みをしないように気をつ

けようという話でまとまる。

「俺がメリケンサックを持ったところで、一体何ができるっていうんだよ。猫の方が凶暴だ。猫パンチの方が強いって」

と、熊篠さんがぼやく。

猫パンチ　ＶＳ　メリケンサックを持った熊篠

うん。絶対に、猫の方が危険だね。

五. 護送中（拘束衣）のクマシノヨシヒコ

遅ればせながら、自己紹介致します。ワタクシ、イトウチアキの職業は理学療法士です。

日本理学療法士協会による定義では、理学療法士[2]とは、「ケガや病気などで身体に障害のある人や障害の発生が予測される人に対して、基本動作能力（座る、立つ、歩くなど）の回復や維持、および障害の悪化の予防を目的に、運動療法や物理療法（温熱、電気等の物理的手段を治療目的に利用するもの）などを用いて、自立した日常生活が送れるよう支援する医学的リハビリテーションの専門職です」云々、とあります。

普段は病院や施設などに多く分布する専門職で、熊篠さんのような脳性麻痺、はたまた健常者の骨折など。様々な疾患に合わせて、基本動作の回復をお手伝いする職業になります。とは言っても、車椅子の人間を連れての旅行は今回が初めてで、学校の教科書で習うことのない搭乗と機内移動についてレポートさせて頂こうと思います。

＊

車椅子のチェックインで揉め、手荷物のメリケンサックで揉め、やっとの思いで搭乗口まで行った我々は、

「妊娠している方や障害を持った方などは優先搭乗ができます」というアナウンスにほっとしながら、搭乗手続きを開始する。

「特権階級〜♪ とっけんかいきゅう〜♪」

と言いながら、熊篠さんがボーディング・ブリッジを車椅子で軽やかに走っ

ていく。

今回の搭乗は、専門職の我々（介護士と理学療法士）が介助に入り、かつ熊篠さんは電動車椅子という自力で漕ぐことのない車椅子だったから良かったものの、これが高齢の介助者と手動車椅子ユーザーだとしたら、脊損の男性とか弱い女の子が介助者だとしたらと考えると大変である。

優先搭乗は確かに有難いのだが、その前段階として、車椅子を預けることも大変で、保安検査場で常に引っかかり続ける車椅子のチェックも大変で、出入国検査に至っては、車椅子ユーザーの出入り口は一番遠くの列に設けられていることが多く移動距離が長いことも大変である。必ずと言っていいほど、何らかのトラブルが起こる車椅子でのフライトは、現場での交渉力かつ介助力が高くないと、海外へ行くのは厳しいと感じる。

そんなことを考えながら、ボーディング・ブリッジと機体の境で待っていると、空港職員が、がらがらと荷台のようなものを押してきて、熊篠さんは慣れた様子でその荷台に移った。

その荷台は、アイルチェア（Aisle Chair：廊下用椅子）と言い、機内通路専用の車椅子である。普通型車椅子では、飛行機のような狭い通路は通ることができないため、子供の椅子位の幅のアイルチェアを使って機内を移動する。

どう見ても、荷台のようにしか見えないシンプルな車椅子に熊篠さんが乗って、転落しないようにベルトをつけるのだが、熊篠さんの上肢の関節拘縮も相まって、あれだ、これは…。映画『羊たちの沈黙』で、ハンニバル・レクターが拘束衣をつけられて、護送される時の光景だな…と思っていた。ちょっぴり、ドナドナも歌いたくなってきた。

その後は空港職員が指定席まで押してくれるのだが、その時の注意点は、もし車椅子ユーザーが飛行機に乗る場合、搭乗手続きの段階でトイレに近い、又は、足回りの少し広い席を指定しておくとよいと思う。

空港職員は、アイルチェアや車椅子への移乗の練習はしていても、搭乗者の排尿・排泄などの生理機能や、移動と移乗能力（車椅子から椅子へ自力で移れるか、介助が必要か、短距離でも歩行は可能か）は把握できないないことが多い。その辺りの配慮は専門職ではないので仕方がないのだが、日本からの出国だけでなくアメリカ国内のフライトでも、トイレから遠くて移乗がしにくい席を指定されたりするので、トイレが近くて、できれば周りが少し広い席にして欲しいと事前交渉をしておくとよいのではないか。

熊篠さんは、（自称）プロの障害者なので、自分の排泄・排尿のコントロールから、体の動きまでを詳細に把握しており、どこに誰がどのように介助に入れば良いと具体的な指示を出せるのだが、そうではない場合は事前に席を指定しておくとよいだろう。

この後の旅程では何度も飛行機に乗るので、アイルチェアには沢山お世話になるのだが、アメリカ本土では「アイルチェアがこない」と機内で十分ほど待たされることもしばしばあった。待ち時間が長い時は、柔道初段の辻元くんが俵のように熊篠さんを担いで機内移動したり、フライト中に熊篠さんが「ウンコがしたい」と言い出した時は、アイルチェアを持ってきてもらう暇が無いので、私と辻元くんの二人で抱き上げて機内通路を移動したりもした。

今回の旅程では、１０時間前後のフライトを何度も行ったのだが、車椅子ユーザーとその介助者にとって心配なのは、機内での排泄、つまりトイレ事情だと思う。ついでに、トイレ事情も書いてしまうが、今回の旅で熊篠さんは排尿には尿器を、排泄にはトイレを使用した。

排便に関しては、事前にトイレに行くことで、急場を除いてある程度のコントロールが可能だが、排尿に関しては時間のコントロールが難しいように思う。熊篠さんのように男性の場合は、周りを気にしながらだが、トイレに行かずとも尿器を使用して、座席で排尿することができる。だが、女性の場合は機内で尿器の使用や、尿器使用時の漏れなどに対する不安があるのではないだろうか。

かといって、トイレですぐに排尿や排泄ができるかというとそれも至難の技で、トイレ近くの座席ならまだ何とか対応できそうだが、全く歩けない場合は致命的である。

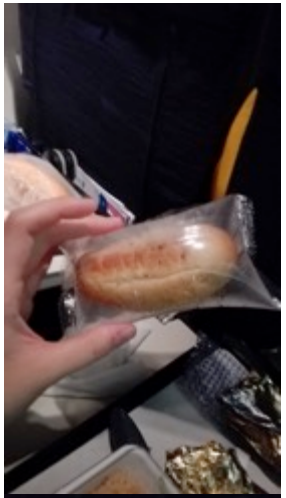
熊篠さんがトイレに行きたいと言った時も、二人掛かりでトイレまで移動したのは良いが、人一人が入るだけでも狭い機内トイレの中に介助者が入ることはかなり厳しい。結局、ドアを開けながらの介助となるのだが、プライバシーも何もないので、せめてカーテンなどでトイレ前のスペースを区切れるような仕組みがあると良いと感じた。

飛行機の種類によっては、車椅子対応のトイレを併設しているものもあるが、併設していない場合が殆どなので、飛行機を設計する段階で高齢者や身体障害者用のトイレを併設する基準が当たり前になると、高齢者や身体障害者のフライトはもう少し楽になるのではないかと思う。

＊

やっと乗り込んだ、機内でふと一息をつく。日本を出るだけなのに幾多のトラブルをクリアした我々には、初対面なのに幾千練磨の苦楽を共にしてきた同志のような、奇妙な連帯感が生まれつつあった。

幾多のトラブルは人を強かにもクレーマーにもさせるが、同時に奇妙なハイテンションにもさせる。乗り込んだ機内で、気圧のせいで膨張するパンの袋を見ても、「みろ、パンがパンパンだぜ」などとゲラゲラ笑える、箸が転がってもおかしい年頃に戻ってしまったらしい。ちなみに、男達の平均年齢は四十歳を超えている。



今思い返せば、想像以上に疲れていたのだろう。辻元くんに至っては、

キャビンアテンダントに英語で、「お茶をください」と言うと、紅茶ではなく緑茶を出されて、さらに「ミルクが欲しい」と訴えて、緑茶にミルクを入れていたことにすら気づいていなかった。

『最近の東京のお人は、緑茶に牛乳を入れるのが流行りなんか。』と、相変わらずすっとぼけた思考をしている私は、緑茶ミルクを飲んだ辻元くんが微妙な顔をした瞬間に、それが注文ミスだったと気付く。

「捉え方次第では、抹茶ミルクだと思えば飲めないこともないよ。」と、そう励ましておいた。

その後、十数時間に渡るフライトを続けたのだが乗ってしまえば、トラブルは特に何もなく。我々は無事、サンフランシスコ国際空港に到着したのであった。

六. 車椅子が悪目立ちしない国

サンフランシスコ国際空港に、日本円とクレジットカードしか持たずに到着した私は、一文無し（現地通貨）というのは、こんなに人を不安にさせるものなのかと思っていた。普段一人旅をする時は、もう少ししっかりしているのだが、他に人がいるとなると私の警戒レベルは地に落ちる。せめて、一万円位換金してくれればよかったのだが、空港のレートが高くて換金する気にもならない。でも、求めよ、さすれば与えられんって言うし（?）、現金がなくとも日本にはわらしべ長者の例もあるし、なんとかなるだろう。

私達はサンフランシスコ国際空港で、宮崎光代監督と合流する予定だ。熊篠さんの交友関係は相変わらず、顔が広くて謎だ。

熊篠さん自身は、障害者のセクシャリティという、世間一般が内容を理解せずに初めて聞くと、拒否反応を起こされるような活動している。本人も赤いTバックをかぶったりして、ふざけてはいるが、会うと意外と真面目だ。障害者に性の支援なんて必要ない、そんなことをやる意味があるのかと批判されながらも、他人の手を借りずに自慰行為ができるようにする自助具を作ったり、障害のある女の子たちの生理用品の取替え方を動画で紹介したりしている。

私たち、リハビリテーション関連の医療専門職は、個人に生じた生活上の

利点と問題点をピックアップする時、ＩＣＦ（国際生活機能分類：International Classification of Functioning, Disability and Health）[*2]いうＷＨＯの提唱した指標を用いることが多い。そしてＩＣＦの第６章に、尿路・性・生殖の機能という項目があり、そこに性機能・月経の機能・生殖の機能など、性に関する項目が含まれている。

近年、リハビリテーションに関わる仕事では、排泄と排尿に関する支援は行われるようになってきたが、日本では性機能に関しての支援はまだ不十分なように思う。ＷＨＯが提唱した生活機能分類の中に、性に関する項目が含まれているにも関わらず、私のようなリハビリテーション専門職は性に関する支援を殆ど行わない。いや、行わないというより、行う必要があると思っていないのかもしれない。

専門職がその必要性に気づいていない以上、一般の人たちに熊篠さんのしたい活動を理解して貰うのは難しいかもしれない。

＊

日本とサンフランシスコの時差もあり、ちょっとお疲れモードに入った私が、ぼーっとしたままターミナルで待っていると、ウェーブのかかった黒髪の女性がカートを押しながら近づいてくる。彼女は宮崎光代さんと言って、日本では、スバルやレクサスのＣＭやショートフィルムなんかを撮っている映画監督だ。十代の時に渡米しそのままアメリカに住んでおり、２０１１年に短編映画『Tsuyako 艶子』で海外の様々なタイトルを総なめにしている。今回はご縁があって通訳兼撮影をしてくれることになった。

ここサンフランシスコで、今回の旅のメンバー四人が揃い、全員が熊篠さん以外と面識がないと思っていたのだが、辻元くんが急に『昔、友達の紹介で宮崎さんに一度会ったことがある』と言い出す。昔、共通の友人を通じて一度だけ会った事があるらしい。その時は、十数年後にこうやって一緒に旅行をするとは思わなかっただろう。一瞬でも袖擦りあった人間の縁とは不思議なものである。

そんな宮崎映画監督の荷物は凄かった。何が凄いかというと、１００Ｌと８５Ｌと６０Ｌと３０Ｌ位のスーツケースを四つも持ってきたのである。後

で確認したら、中身は三脚やらライトやらカメラやらと、大量の撮影機材が入っていた。女一人、アシスタントもなく、華奢な体でよくこれだけの荷物を持って独り撮影に乗り込んできたものだと思う。撮影機材の詰まった大きなスーツケースは、力持ちの辻元くんの左右の手に一つずつ収まり、残り一つは熊篠さんの車椅子の後部座席に収まって、私たちはバークレイへと向かった。

＊

バークレイへの道のりは電車を使うことになった。アメリカに来てからの良いところは、電動車椅子だからと言ってジロジロ見られることが少ない所だ。日本にいると車椅子ユーザーは手動か、電動かを問わず、街を自由に移動しているのを見かけることが少ない。

初めて熊篠さんに会った時、電動車椅子に乗って自分の意思で街を自由に移動していることに理学療法士として驚いたものだったし、彼の後部座席に乗って東京の街を回ると、日本の歩道が如何に車椅子ユーザー泣かせであるかもを知った。熊篠さんが日本で赤い車椅子を走らせていると必然的に人の目を集めるが、アメリカでは日常風景として溶け込んでいるように思えた。

サンフランシスコの電車移動で良かったのは、駅のホームと電車の間に段差と隙間がないことだ。いちいち誰かの手を借りることなく、乗りたい時に乗降ができる。

日本では、電車とホームの間に必ず隙間と段差と傾斜があるので、電車を使うたびに改札で駅員に連絡する必要がある。乗降駅の名前を伝えると、駅員が持ち運び式のスロープを持って、乗降駅のプラットホームで待っていてくれるのだが、車椅子ユーザーは電車に乗るたびにいちいち駅員に連絡をしなければならないし、駅員は乗降駅でスロープを持って待機してなければならない。好きな駅で、好きな時に降りることができる権利がないので、ぶらり旅なんてできない。

行き先を逐一告げずとも、好きな時間に好きな場所で、自由に乗降ができたらどんなに良いかと思う。歩ける人間には当然のように許されている権利が、日本の車椅子ユーザーには許されていないのだ。

サンフランシスコの電車の中では、自転車や車椅子ユーザーが乗車できるスペースが確保されていて、そこに車椅子を停めて私達はバークレイへの道程を一時間ほど電車に揺られた。日本でも、時間をいちいち伝えずに乗降できたり、車椅子や歩行器などを自由に止めたりできるスペースが当然のように確保されていれば、ベビーカーを押す母親達も、車椅子ユーザーも、肩身の狭い思いをすることがないだろうに。

七. サロゲート・パートナーのシェリル氏

バークレイでの初日は、サロゲート・パートナーのシェリル・T・コーエン・グリーン氏のインタビューから始まった。シェリル氏が来るまでの間、宮崎監督が撮影機材を手際よく設置し、撮影の準備を行っていく。

シェリル氏は、２０１２年の映画『セッションズ』のモデルになった人物だ。マーク・オブライエンという、幼少期にポリオにかかり重度の身体障害を持った詩人の、童貞喪失の相手をプロフェッショナルとして引き受けた人物のモデルとなる。映画では身体障害者が性行為をすることや、性行為に至るまでの体の反応や失敗、性行為に対するキリスト教の倫理上のタブーに揺れる心境など描いている。映画ではそのサロゲート・パートナーをヘレン・ハントが演じた。

ここで気になるのは、サロゲート・パートナーとは何かということだが、ＩＰＳＡ（International professional surrogates association）[3]による定義を一部要約すると、セラピスト、依頼者、そしてサロゲート・パートナーの三者からなるチームで行う治療であり、１９５０年代から行われた、マスターズとジョンソン[4]らの人間の性反応に関する研究をベースにしている。

サロゲート・パートナーは依頼者と一緒に、依頼者の自己認識や、身体と感情面の交わりに関するスキルを伸ばすようにデザインした、構造化、または半構造化された体験を共有する。これらの治療体験にはパートナーとのリラクセーションやコミュニケーション、官能・性的な接触、そしてソーシャ

ル・スキルのトレーニングも含むとある。セッションの回数は、初回面接の段階でお互いの目標を確認し決める。ここで注目すべきなのは、性行為を行うことがこのセラピーの目的なのではなく、それらは治療の一過程であり、治療には情意領域[*3]を多く含むことである。

どのような人たちがサロゲートの治療を必要としているのかということは、様々な問題が提起されているが、身体的なものは、自身の身体に対するネガティブなイメージ（変形や不随意運動などを含む身体障害）や、勃起障害などの性機能の機能不全に起因するもの。精神や社会的な問題は、性に関する自信の喪失、近親相姦や性的虐待などを挙げている。

シェリル氏自身も、ＩＰＳＡによる協会独自のライセンスだけでなく、セクシュアリティに関する分野での博士号を持っている。ここで紹介したことは、インタビュー内容や自伝の一部[5]なので、詳しくはＩＰＳＡのサイトをご覧頂くか、彼女の自伝や映画などを見て頂ければと思う。

＊

インタビューの準備を済ませ、ホテルでそわそわしながら待機していると、シェリル氏が到着したと連絡が入り、熊篠さんと辻元くんが彼女を迎えに行く。するとすぐに、ブロンドのショートカットの女性を部屋に案内してきたのだが、７１歳と思えない、綺麗な女性だった。

今回、熊篠さんがシェリル氏に会いたかった理由は、２００６年に出版されたセックス・ボランティア（新潮文庫）という本に、サロゲート・パートナーという職業が紹介されていたことが始まりだ。サロゲート・パートナーの存在についてはその当時から知っていたが、２０１３年に日本で映画セッションズが公開されたこともあり、会いにいこうと考えたらしい。

※インタビュー内容文字起こし

彼女のインタビューの全体を通して感じたことは、彼女には一貫した姿勢があり、それは、クライエントとセラピストの両者、お互いのコミュニケーションというものを大切にするということだった。サロゲート・パートナーという仕事は、性という倫理的にも社会的にもナイーブな問題を扱う仕事だ

が、彼女にとってこの仕事は、身体や精神の触れ合いを通して、人を信頼することを学ぶ作業過程に思えた。

二時間近くに及ぶインタビューの後は、シェリル氏とハグをして、彼女を見送る。

熊篠さんに、「ハグをした感想は？」と聞くと、「すっっげぇ、良い香りがした」とのことだ。

それは重畳。バークレイまで来た甲斐があったね。

八．脊髄損傷のエリック博士

シェリル・T・コーエン・グリーン氏のインタビューの後、我々はバークレイの住宅地を訪ねていた。電動の車椅子が悠々と通れるマンションの通路、そしてエレベーターを登って、その一画に住んでいたのは、レイフ・エリック・ビックス心理学博士だ。

エリック博士は２００４年、インドでの旅の途中に崖から転落した。一命はとりとめたが、第４・５頚椎を損傷し、胸部から下が麻痺する四肢麻痺となった。その後、そのトラウマを克服して、２００６年より障害者の性の問題に関してサポートを行う、「Sex Ability」[6]という団体を立ち上げた。

この団体は、様々な身体障害を持った人達に合わせたコーチングやグループセッションを行い、自分の障害とそこで生じる人間関係を親密で愛情のあるものにすることを目的としている。

＊ インタビュー文字起こし

保険について補足すると、アメリカと日本の大きな違いは公的な制度の違いで、日本は国民全員が加入する国家主導の国民皆保険に対して、アメリカは民間資本が主となる、６５歳以上の高齢者と障害者・末期腎疾患患者のための『メディケア』と、最低所得層のための『メディケイド』の二つから成っている[7-8]。オバマケアをめぐる、保険制度のもたらした功罪についての批判は様々あるが、エリック博士の場合は、幸運なことにメディケアに入ることができ、医療費の他に車椅子なども支給対象になっている

そうだ。

日本でエリック博士の乗るような機能の高い車椅子を購入する場合、支給限度額が決められていることが多く、高機能の電動車椅子は殆どが自費購入になる。高機能の電動車椅子は、使用者の活動範囲を広げて生活の質を高めることができるが、２００～３００万円はに超えることが多く、日本ではなかなか手が届かない一品となっている。

エリック博士の電動車椅子は、ティルトリクライニング機能のみならず、日本の車椅子ではほぼ見ることの無い、シートのアップダウン（上下昇降）とスタンディング（起立）という機能が付いている。

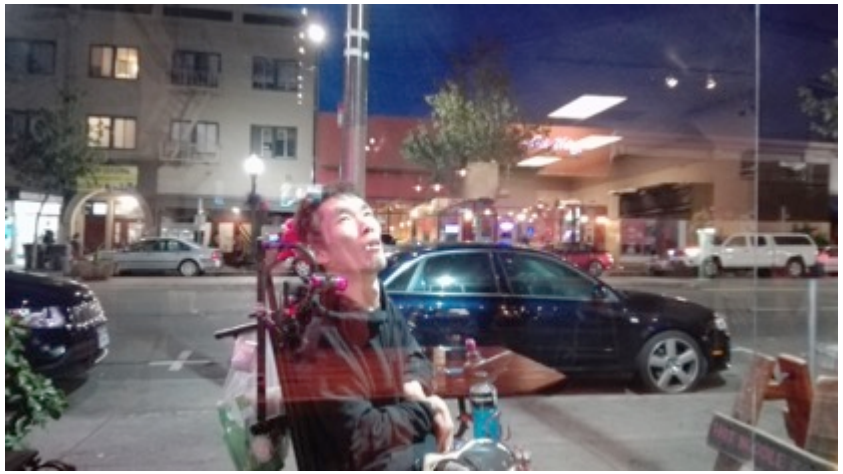
ここまでが彼の車椅子の標準装備になるのだが、さらに凄いところは、彼の肘掛の内側には数個のスイッチが付いていて、その内の一つを押すと、なんと玄関ドアの押し戸が電動で開く仕組みになっているのである。自宅内の電気も付くのである。

身体障害者の住環境評価を行うのも、私の仕事の一つなのだが、車椅子につけたスイッチ一つで、自宅内の殆どができる仕組みに驚く。

九．市バスを追いかけツーブロック

エリック博士のインタビューを終えると、ちょうど夕食時になっている。私たちは近くにある出版社で、女性の身体障害者について記載してある、日本未出版の本を一冊購入して、さらにその近所で夕食をとった。ちなみにこの時点でも、私は未だに一文無しである。

「ホテルに帰ってジャグジーに入りたい」
と言い出した辻元くんを皮切りに、
「あぁ、それええなぁ。」
「よし、熊篠さんをプールにいれて水治療法をしよう」
「えー。いやだよ。あの安定しない感じがだめなんだ。筋緊張あがっちゃう。だいたい、水着持ってない」
「大丈夫、ブリーフのまま入ればいい。介護福祉士も理学療法士も居るから。どんとこい」
などと、言い合う。



今日のインタビューが無事に済み、気も抜けていたのだろう。試しに

車椅子対応のバスに乗ってホテルまで帰ろうということになり、到着したバスに乗車する。
　こちらの見事なバリアフリーには、職業人として本当に惚れ惚れするのだが、バスの運転手は車椅子の乗客が居るからと言って、いちいちバスから降りてスロープを準備する必要がないのだ。車椅子の乗客が居る場合、運転席でスイッチを一つ押すだけで、乗降口からスロープが歩道に出るようになっているのである。そして、バスの中には当然のように、車椅子が乗降できるスペースが設けられている。
　私が津軽に来て初めてローカルバスに乗った時、ミレニアムもとうに過ぎ去ったこの現代で、バスの床面が未だに木造であることにカルチャーショックを受けたものだったが、バークレイのボタン一つでスロープが出てきちゃうバスには反対の意味でカルチャーショックを受けた。

　まるで初めて東京にでてきたお上りさんのようにバークレイのバスに感動していると、みっちゃんが運転手と何やら話をしている。
「このバス、ホテルの方まで行かないんやって。降りよっかー」
と、せっかく乗ったのに降りた。

　ぶるるるるるるる。

走り去ったバスを見送りながら、
「あー。ホテル方面のバスは、違うナンバーのバスなんやって。ちょっと待って、次に乗ろう」
と、みっちゃんがいう。そして唐突に、
「……バスにカメラ忘れた！！！」
と、はっとした顔をして、
「友達から借りてきたカメラやねん！」
と言いながら、パンプスで猛ダッシュした。パンプスなのに、超早い！ 光代。

　バスを追いかけ走り出すみっちゃんを、２０メートル位見送ってから辻元くんもはっとして、

「俺の荷物見とってくれ！」
と言い、自分のデイパックと小銭入れを私の目の前に置いて走る。
『なぜ、小銭入れを置いていく。辻元。』と、心の中でツッコミながら、呆然と置いていかれる私達。
見事なターミネーター走り*4でバスを追いかける二人が、遥か遠くになった頃、武闘派ではない熊篠・チアキ組は、とりあえず、大きな撮影機材とリュックと小銭入れを持って、マイペースに追いかける事にした。

しかし、このメンツ、見事に何か持っているのである。ロマンスの神様ならぬ、トラブルの神様に見守られているのではないかと、自分で歩く気もなければ走る気もない私は、辻元くんに置いていかれたデイパックを背負い、撮影機材の入った８５Ｌのキャリーケースを引っ張り、首から撮影用のカメラを下げ、自分のカバンを車椅子に引っ掛けて、熊篠さんの車椅子の後方席に立ち乗りをする。総重量は２００kg位であろうか。
そして、猛スピードで走って行った二人を追いかけて車椅子を走らせるが、走れども、走れども、二人の姿が見えないのである。

「一体、あの二人はどこまで走っていったんやろうねぇ」
「もうだいぶ追いかけたね。二区画位走った気がする。うーわー。海外で紛失した場合って見つかるのかな」
「みつからんかもねぇ。あ、あそこの角に辻元くん居るよ。」
私たちは二区画位先にやっと、辻元くんが立って居るのを見つけた。
「辻元くーん！！ カメラ大丈夫だった？」
「ダメやった！ もう少しでバスに追いつきそうやったんやけど、ぎりぎりで行ってもうた！ いま、みっちゃんがパトカー止めとんねん！ バス追いかけるつもりや！」
「おっけ！ 了解した！ 検討を祈る。我々は荷物あるから、荷物ホテルに運んで置くね！あ、でも。小銭入れは返しとくね」

バスを追いかけるのに、何故かパトカーを止めている、みっちゃんのアグレッシブさについては敢えて突っ込まずに、良い子の熊篠・チアキ組はホテルまでの道のりを車椅子で飛ばしたのであった。

＊

ホテルまで３０分位の道のりを二人で帰り、ホテルに着いた頃、みっちゃんと辻元くんは先にホテルに着いて、出迎えてくれる。

「カメラみつかったよー！ ありがと！ そしてごめんー！」

辻元くんの話によると、バスを追いかけて走ったものの、あと一歩というところで追いつけなかったみっちゃんは、まず走っていたタクシーを停めたらしい。そして、『あのバスを追いかけて！』と頼み、さらにたまたま通り掛かったパトカーをもの凄い勢いで停めた上で、警官にバスの中にカメラを忘れたという事の顛末を話したらしい。

事情を聞いた警官は、『おっけー。今からバス会社に問い合わせて、どのバスにカメラが置き忘れているかを確認するぜ。』的なことを言い、バス会社に確認を取り、『よし、確認が取れた！どこどこのバス停に１０分位停まっているから、行きな！』と、バスを停めちゃったらしい。

バスの方では、運転手が『忘れ物をした人が来るまで、今からここで十数分待ちます』と乗客にアナウンスをした上で、運転手はバスの外で優雅にタバコを吸っていて、タクシーで乗り付けたみっちゃんと辻元くんにカメラを渡し、記念撮影までしてくれたらしい。

日本だったら、バスが停留所で１０分近く止まれば顰蹙ものであるが、さすが、自由の国、人種のサラダボウルアメリカ。

全員の価値観が違う国では、『空気を読む』なんてしていられない。むしろ自己主張しなければ、誰も気づいてくれない。ちょっとやそっとのことでへこたれて居たら、生きていけないのだなと思った。

一〇. 優しい嘘

平凡パンチみたいな刺激は求めていない。へいへいぼんぼんに、生きていきたい。それなのにどうして毎日、トラブルの神様、今日もありがとう。

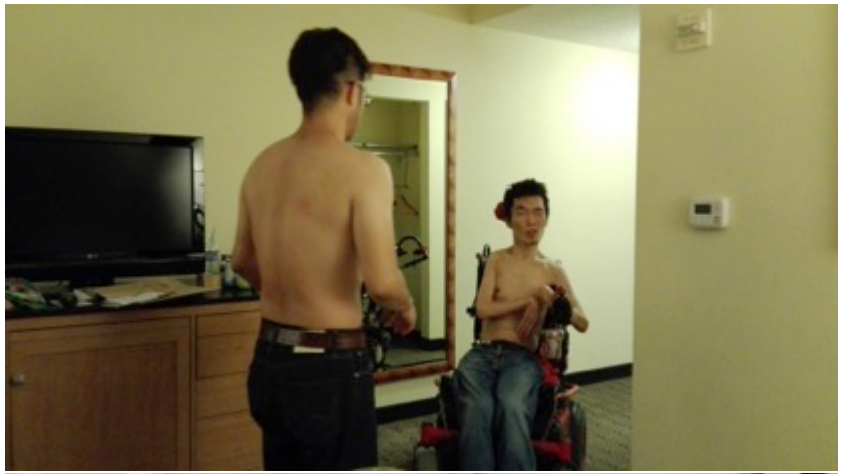
3日目は、バークレイからサンフランシスコ空港に戻り、カナダまで飛ぶ予定だったのだが、その道のりで携帯を持っていない辻元・伊藤ペアがバスの運転手によって全く違う駅に降ろされ、電動車椅子のため、ホテルの送迎バスに乗れなかった熊篠・光代ペアとはぐれるというトラブルから始まる。

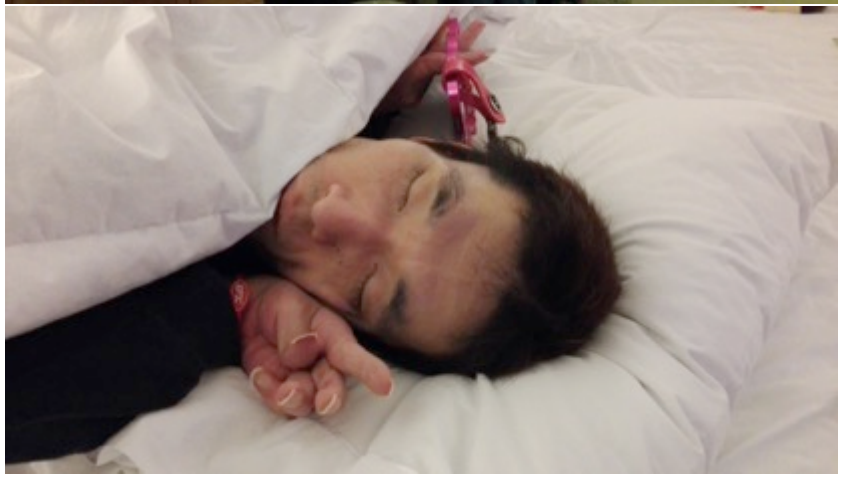
辻元くんは間違った駅に降ろされたと気付いていて、

「何か、ここ違うよね。来た時と違うよね」

と、言い続けたが、筋金入りで年季の入った方向音痴の私は、

「えー?そうなの?」





と、さっぱり解っていなかった。私と組まされた辻元くんは、さぞ大変だっただろう。私はいつだって自信満々で尊大な態度をとるが、大抵のことは理解していない。道を聞かれても解らない。

朝っぱらからはぐれるというトラブルは熊篠・光代ペアの機転にて解決し、どこかの駅で発見された我々は、携帯を持っているみっちゃんから二度と離れまいと誓う。いや、我々も携帯持ってないわけじゃないのですけどね。なんとなく国際電話モード（有料）にしたくなかっただけで…。

＊

バークレイからサンフランシスコまでの道のりを電車で戻り、サンフランシスコ空港に着いた頃には、すでにフライトギリギリの到着となってしまっていた。健常人なら急いで乗るだけなのだが、車椅子の乗降が必要な我々は、『遅すぎて乗降ができません』と搭乗員に言われてしまう。

なんだかもめているなとは思っていたのだが、交渉はすべて光代・辻元ペアがしていたので、まさか乗降拒否をされていると、私は思いもせず、カウンター後方で熊篠さんと待つ。

カウンターでは、『この便には、乗れない』と言う航空会社職員と、みっちゃんが交渉をしている。同日内の別便振り替えを希望するが、難しいため次の日のフライトになると伝えられる。もちろん、1日遅れのスケジュールは組んでいないので、その案はボツである。

辻元くんの話によると、そこからが光代節の炸裂で、『車椅子の彼（熊篠さん）は、何としてでも今日中にカナダの病院に行かねばならず、彼女（チアキ）は彼のドクターで付き添っている』というようなことを言ったらしい。

辻元くんによると、みっちゃんの交渉術の凄いところは、相手の立場を考えた上で交渉するところらしい。あんたも大変やろうけど、私も大変やねんという感じで、相手を思いやりながらこちらの意見もゴリ押すらしい。すると、たまたま次の便に空席ができたこともあり、その日の

うちのフライトが可能になった。

道中でトラブルは何回も多発し、その度にみっちゃんの交渉術にお世話になるのだが、辻元くんは英語で交わされるその交渉術を常に側で聞いていた。そのせいか、日本に帰国する頃には辻元くんも立派に、自己主張して自分の意見を伝える（笑顔でゴリ押す）術を身につけて居た。

ただバスに乗って空港に行き、飛行機に乗るだけなのに、朝から逸れたり、飛行機には乗れなくなりそうになったり、毎日のトラブルには事欠かない。

車椅子での移動は、建物や年構造上、健常者より移動距離が長くなる傾向があり、予定より時間がかかるということがよく解った。

一一．　トロントの中心で爆走する

トロントの初日は、Come as you are Co-operative というアダルトグッズの専門店の取材をする予定だ。時間に余裕があったので、トロントの街を車椅子で散策することにする。

熊篠さんの車椅子は外国産なので、他の車椅子より馬力がある。車椅子の後方に人が立ち乗りできる車輪が付いていて、そこに人を乗せて街を走ることもできる。ちなみに女性専用なので、男は乗せてくれない。

熊篠さんが走らせる車椅子の後方に乗っているといつも、世の中がいかに車椅子ユーザーに優しくないかを感じる。日本の歩道と車道のちょっとした段差は上り下りの度に振動が来るし、雨の日、段差の先に雨水が溜まったりしていると最悪である。歩道を走れば、歩行者には問題のない傾斜角が車椅子を傾け、歩道は道路と違って凸凹していて最高に走りにくい。道路は往々にして道が綺麗なのに、歩道を走った時の走りにくさといったら比にならない。

それに比べてトロントの街並みは、道路と歩道の段差が非常に緩いか、全くないので車椅子で走りやすい。私たち健常者が気にもしない、たった数センチメートルの段差がハードルになり、それだけで外出できなくなるなんて、私たち健常者は考えもしないのだろう。

トロントの街並みを熊篠さんの車椅子に乗って走ると、電動車椅子とバギーの多さに気付く。鼻から酸素チューブをつけている小人症と思われる男性、脊椎変形、脳性麻痺など。日本だと重度障害とみなされ、一人での外出なんて駄目だと、頭ごなしに言われるような人達が、それぞれの障害に合わせてカスタマイズした電動車椅子で街を走っている。段差も少なければ、傾斜も殆どないトロントの街並みを、自分の行きたいところへ車椅子を走らせ、街を歩く人たちも慣れた様子で道を譲る。

トロントの市街は古い町並みと新しいビルが入り混じっているが、小さな店舗の入り口は段差がないことが多く、押し戸の前には大きな車椅子マークのボタンが付いている。小さな店舗の場合、入り口を引き戸（横開き）にすると倍の設置面積が必要になるのだが、押し戸（前後開き）の場合はドア一枚分の大きさで済む。だが、押し戸は前後に力を入れなければ開かないので、車椅子や歩行器のユーザーには開閉しにくいという欠点がある。日本での自動ドアは、引き戸であることが多く、前後に開くような押し戸の場合、自動開閉する機械をつけた店舗は殆どない。

交通機関については、トロント交通局[9]（Toronto Transit Commission）がバスを含む各路線のバリアフリー化を進めており、Wheel Trans というバリアフリーのバスを走らせている。バークレイと同じように、ボタンひ

とつで歩道側へスロープが設置され（動画参照[10]）、車椅子や歩行器ユーザーがスロープを移動して乗降でき、バス内部に車椅子の駐車スペースが必ず設けられている。

トロント交通局の興味深いところは、トロント交通局自体が自局のバリアフリー化についての諮問委員会をもっていることだ。Advisory Committee on Accessible Transit (ACAT)[11]と言って、実際に車椅子を利用しているユーザーやアドバイザーから成り、トロント交通局に対して障害を持った人間が利用できる適正規格や、アクセシビリティについての提言を行ったりしている。

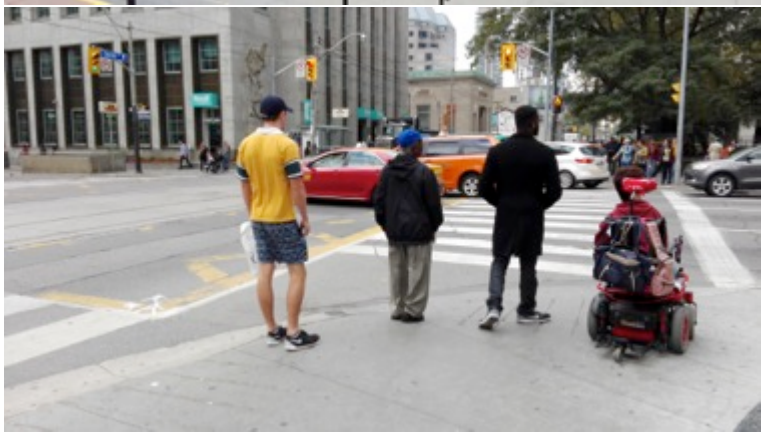
紹介されている例としては、駅のエレベーターのボタンに上下表記だけしかなかったものを、点字での上下表記を記載するようにして、視覚障害に配慮する。電車とプラットホームの間に生じる傾斜角と段差をなるべく小さくして、車椅子などの移動支援機器が利用しやすいようにする。市内のバスを低床のものに変えて乗降しやすくする。移動支援機器を使うユーザー向けに講習会を行うなど、多岐に渡っている。

実際に移動に困難を要する人を内部機関に入れ、自分たちの交通機関の利便性を批判してもらうことで、バリアフリー化を進めているのだ。全ての交通機関と施設でそれらを急に行おうと思うと、予算や企画立案上、間に合わないことが多いが、トロント交通局は１０年計画でそれらを行ったそうだ。トロント市自体も、車椅子や白杖のユーザーなど、バリアフリーをすすめる街の規格をガイドライン[12]として提示しており、人種差別やハラスメントなどの人権問題と同様に、障害者が持つ権利も重要視し、明記している。

カナダの街並みを熊篠さんの車椅子に乗り走っていて思うのは、肌の色や民族や言語、宗教や思想の違いを許容するのと同様に、障害を持った人たちが当たり前のように生活できること。街の中に繰り出していけることを、社会全体が許容しているのだ。だからトロントの街では、こんなにも電動車椅子のユーザーが多いし、歩けばなんらかの障害を持った人たちに出くわす。

日本でもいつの日か、電車の乗降のたびにいちいち駅員を呼ばなければいけないシステム、バスなんて車椅子で普通に乗れるものでないという常識、入りたくても入れない建物の段差が、早く無くなってしまったら良い

のにと思う。そのためだったら、私はバリアフリーの嘆願書でも、具体的な改変案でも、専門家としていくらでも意見を書くのに。



一二. ありのままの君で来て

トロントの街を車椅子で駆け抜け、アレクサンドラパークへ向かう。目的地は、アダルト・グッツ専門店のCome as you are Co-operative[13]だ。トロントにもアダルト・グッツ専門店は沢山あるが、何故この店に向かったかと言うと、２０１０年にアメリカの出版会社から発売された、一冊の本が理由だ。

それは、小児科医のミリアム・カウフマン医師が書いた、『セックスと障害の究極ガイド[14]』という本で、この本は今まで注目されることのなかった、障害者と性行為について記載した専門書である。

簡単に紹介させてもらうと、第１章『障害者とセクシュアリティに関する神話』というタイトルで障害者のセクシュアリティに関する、よくある誤解の話から始まり、性に関する解剖学、コミュニケーションの取り方、マスターベーション、他人とのセックスの仕方、感染症についてなど多岐に渡る構成になっている。

この、『セックスと障害の究極ガイド』という本に対して、

「だって、アルティメット・ガイドだよ？ アルティメット！ セックスとディスアビリティのアルティメット！！」

と、アルティメットという言葉に鼻息荒く反応する熊篠さんを、少しだけ冷ややかな目で見つめながら、私たちはCome as you are Co-operativeの門を叩いた。

こぢんまりとした外観ではあったが、段差のない入り口、そしてプッシュボタン一つで開閉する押し戸のおかげで、車椅子でも堂々と入室できる。店内はモスグリーンで統一され、少し低めの陳列棚に綺麗にアダルト・グッツが陳列されていた。日本のアダルト・ショップにありがちな、ごちゃごちゃしていて、男だけの秘密の店という印象はなく、外から店内は見えるし、小洒落た女性向けの雑貨店のようである。並んでいるのはコンドームやローション、バイブレーターにボールギャグとかオナホールだけれどね…。

トロントにも沢山のアダルト・グッツ専門店があるが、このCome as you are Co-operativeは、先ほど紹介した本の共著者であるコリー・シルバーバーグ氏が、共同経営者となっている。

残念ながら今回の旅でコリー氏に彼と会うことはできなかったのだが、このお店の面白いところは、セックス・トイの種類や使用方法、洗い方、製造会社など、当り障りのないところを紹介していると同時に、セックス&ディスアビリティ（セックスと障害）というフリーペーパーなどがあるところだ。

障害者との性行為は、その障害によって様々なリスクが生じる。例えば熊篠さんのような脳性麻痺とのセックスは、イクときに下肢の振戦という震えが生じたりするらしい。私たち医療従事者は、振戦を病態の一つとして見慣れてはいるが、一般の人達が見たら、病的な痙攣状態にすごく驚いてしまうのではないだろうか。脊髄損傷では血圧低下などのリスクがあるし、呼吸器疾患なども呼吸状態に影響を及ぼすリスクがある。変形性股関節症などを持った人は、体位によっては股関節の脱臼リスクがあるので、取れる体位と取れない体位がある。言語障害がある故に、セックス中に言葉のコミュニケーションが取れず、辛いと言えないこともある。脊髄損傷のように身体的に勃起が難しい時、挿入だけがセックスかというと、体に残された感覚を使ってオーガズムを感じたりもする。

健常人の場合、性欲解消のために、マスターベーションを行うこともあると思うが、障害によってはその難易度が高い時もある。

熊篠さんを例にすると、彼は指の変形が著しいので、そもそもアダルト・グッツを持つことができない。マスターベーションをするための道具はあ

れども、使うことができないのだ。
そこで、自助具という、物品を使用するための補助機器を使ったりするのだが、この自助具は障害特性に合わせて作られる、セミ・オーダーメイドの形をとるので量産が難しい。
食事をするためのスプーンのグリップ、歩くための手すりやその配置、車椅子のレバーなど。障害特性に合わせた物品選定や作成、その使用方法などは、医療専門職の中で作業療法士が得意としているが、マスターベーション用の自助具を作ったり、選ぶ手伝いをしたりという報告はほとんど聞かない。
Come as you are Co-operative では、障害者も同性愛者も、誰にでも開かれたお店をという方針での運営をしているので、障害特性に合わせて、アダルト・グッツ選びの相談に乗ってくれるそうだ。なんと頼もしいお店。
インタビューでは共同経営者の一人のジャック氏に、このお店を運営する方針などを聞いてみた。

＊ インタビュー文字起こし

私たち健常人はどこか心の隅で、障害者には性欲がないとか、パートナーを得たいという要求がないとか、彼らは天使のような存在だとか。そこに居る個人として認識するより、過剰な美化や、あるべき欲求がないものだと思いたい節があるのではないかと思う
今まで障害者が性行為をしたいという望みを持っていても、日本では性について秘匿すべきことだという風潮がまだあり、当事者と家族、その支援者間で障害者の性について議論することは少ない。障害者が性行為をするという、今まで公の場面では考えたり、議論すらされなかったことが、このような本によって少しずつ世の中に出始めている。

ちなみに、熊篠さんは意図的に振戦という体の痙攣状態を出すことができるのだが、女の子の中にいるときにそれを行うと、ブツがブルブルして、女の子を大変喜ばすことができるらしいっすよ。

SEX
WORD

come
as you are
WWW.COMEASYOUARE.CO

一三.　闘うお姫さま

２０１２年のニューヨーク、一人の女性がミスウィールチェアー・ニューヨークに選ばれた。

彼女は幼少期に脊髄性筋萎縮症を患い、車椅子を使用する生活を送っていたが、大学で臨床心理学の学士を取得し、その後博士号まで取得している。その日はブロンドの髪に、セクシーなドレスとヒールを着こなして、電動車椅子で待ち合わせのカフェに現れた。

彼女の背骨は少し曲がっていて、殆ど歩くことのない足はとても細かったけれど、背骨の変形で少しだけ重心が右に寄る座り方は彼女の腰回りのボディラインを強調しているようにも見えたし、髪をかきあげる仕草やカップを持つ手付き、首を少し傾けてはにかみながら笑う笑顔がたまらなく可愛かった。

彼女はダニエル・シェイパック博士[15]。臨床心理学の博士号を持ちながら、２０１２年のミス・ウィールチェアーＮＹ、そして車椅子でＮＹのランウェイを走るファッションモデルである。２０１５年にはバーナード大学で行われたTED Talk[16]のスピーカーとしても講演しており、学術面や

社会活動のどちらもこなす才女である。

＊ インタビュー文字起こし

彼女を見ていると、障害の有る無しに関わらず、女の子たちはもっと、女の子らしく、そしてどんどん勉強して賢くなって良いと思う。

障害があるとどうしても、衣服は着脱のしやすさという機能面が優先されて、お洒落であるかどうかは二の次になりやすい。車椅子に乗った時に、自分が美しく見えるかなんて気にしていられないこともあるだろう。移乗の邪魔になるからハイヒールは履けないという意見もあるかもしれない。好みの服を試着してみたくとも、フィッティングルーム自体が、車椅子が入れる構造になっていないというバリアもある。

でも、私達が撮影でダニエル博士のポートレイトを撮っている間も、ダニエル博士はバックを持ち替えたり、ポーズを撮ったりしながら、どうやったら綺麗に写るかを気にしていて、ポーズを工夫する仕草がものすごく可愛らしかった。可愛くあろうとする彼女が可愛らしいので、私は撮影の間中、ずっと彼女にキュンキュンしていた。

そして、彼女の功績は障害を持っていたって、美しく、そして賢く居られることを世間に証明して見せたことだと思う。私は修士号しか修めていないが、大学院で博士号を修めるということが、時間や体力的にどの位大変かという事は理解しているつもりだ。沢山の書籍や文献を検索し、実験やフィールド・ワークを繰り返して、ひたすら仮説検証を繰り返していく。

見た目が綺麗なだけの女性でも、賢いだけの女性でも足りなくて、どちらも兼ね備えた上で、社会的な活動を行ってきたことが評価されたのだろう。

ダニエル・シェイパック博士は、障害というハンディキャップすら自分の強みにしてしまう。マイナスをプラスに転換する力を持った、闘う女性だ。

一四.　さよならＮＹ、そしてやっぱり最後までトラブル

ニューヨークでのインタビューを終え、帰国するために、出発の３時間位前に余裕を持って飛行場に向かう。約一週間の旅だけれども、みっちゃんに、通訳兼ガイド兼撮影でお世話になりっぱなしの一週間だった。

出国手続きで電動車椅子が預けられない事件を皮切りに、メリケンサック型携帯電話ケースが手荷物検査で引っ掛かる事件が二回。カメラをバスに忘れて追いかける事件が１回。ホテルバスの手違いで、辻元・伊藤ペアが全く違う駅に下される事件が一回。搭乗手続きに間に合わず、フライト変更になる事件が一回。航空機の移動で電動車椅子のバンパーやチェーンが破損する事件が一回。ホテルの予約が取れていない事件が二回あった。

毎日、毎日！ドリフのコント並みに何かが起こるので、今日も何か有るに違い無いと思っていた。

思ってしまっていた時点で負けだったのだろう、やっぱりトラブルが起こる。車椅子での移動に手間取っているうちに、チェックインの規定時間

を過ぎてしまったのだ。
本来なら手荷物を預け、身体検査をしてからの搭乗となるのだが、荷物を持ったまま身体検査をして、ターミナルへ向かう。トラブル対応に慣れたみっちゃんのおかげで、ＣＡさんに連絡が行き、優先で誘導される。我らの仏様のようなみっちゃんと、全員ハグをして別れた。

アメリカはテロの可能性があるので手荷物検査が厳しく、身体検査でも時間がかかる。このままでは、フライトにまた遅れてしまうと思い、先に検査が終わった辻元・熊篠ペアに
「私は後から追いかけるから！ 辻元くん、熊篠さんを連れて、先に行っていて！」
と、格好良く言ってみる。なんか、私映画のヒーローみたいじゃん。

スーツケースの中身をテープでベロっと検査され、麻薬なのか火薬なのか、なんだかよく分からない物質を検査されているようだ。海外に出ると往々にしてあるのだが、『フライトに遅れそうなので、急いでいます。』と言っても、皆我関せずマイペースなのだ。『ラップトップは入っているのか。』『何か危険物は持ち込んでいないか。』など、質問されて、ゆっくり検査されていく。『だから、急いでいるって言ってるじゃん』と、心の中で思いつつも、笑顔だけは忘れない。ここで相手を怒らせて、時間を浪費するわけにはいかぬのだ。
そして、手荷物検査がようやく終わり、よーいどんで搭乗口まで猛ダッシュする。走れ！ 走れ！ チアキオー！
。搭乗口までこの位の距離だろうと脳内計算した距離と自分の肺活量を比較し、これ位のペースで走っていけば着くだろうと概算した距離を、スーツケースを引いて走る。だがここで盲点だったのは、ここは成田でも羽田でもなかったのだ。
はしれどもはしれども、我が搭乗口全く見えず、ぢっと前を見つめて走る。完全に計算ミスである。私は完全に失念していたのだが、ここは、何もかものサイズが大きい国アメリカだった。成田と羽田を基準にしてはいかん。
ただでさえインドア派なのに、走っているうちにだんだんと息が切れ始

め、もうこれ以上は走れないとスピードダウンしたところで、なんと目前にヒーローの如く熊篠さんが赤い彗星（車椅子）で現れたのである。何なのこのタイミングの良さ！

「チアキせんせー、ターミナルまで来れないかと思って」
「熊篠さんマジで神！ これ以上走れないかと思った！ 乗せて！」
「はいよー」

熊篠さんの電動車椅子の後方車輪を引き出し、乗りながら後ろ手でスーツケースを引っ張る。日本国内で出すと怒られちゃうけど、アメリカでは問題無い速度で、ターミナルを走っていく。熊篠車でかなりの距離を走り、やっと搭乗口に着くと、辻元くんが係員と車椅子を手荷物に預ける算段をして待っていた。常々思うのですが、やっぱり自分はヒーローという柄は似合わず、端役と三文芝居が似合うのだと思う。

ここから先はＣＡに日本人がいたので、日本語がすんなり通じ、手荷物や車椅子をボーディング・ブリッジで預け、機内に乗り込む。アイルチェアーで通路を移動し、やっとの思いで座席に座る。

「やっぱり最後まで、ギリギリの搭乗になるねー。」
「予定よりだいぶ早く出ても、車椅子の動線が健常人と違うからね。移動ですら、遠回りをせざるをえない。階段の度にエレベーターを探したりしなきゃならんしね」
「やっぱり最後までトラブル続きだったねぇ。」
「まぁ、乗ってしまえばこっちのもんでしょ。はあぁー。あとは成田に着くだけか」

シートベルトを締めて、感慨深くこの一週間の旅を思い出す。トラブル続きだったけれども、私が困ったことはさほどなく、みっちゃんと辻元くんが頑張ってくれて、快適な旅だった。熊篠さんのおかげで道に迷うこともなく、沢山の活動をしている人たちにも出会った。私、本当に、何しについてきたんでしょうねぇと思いつつも、それは気付かなかったことにし

よう。
飛行機がニューアーク・リバティ空港を離陸していく。ニューヨークの街が小さくなっていく。さよなら、アメリカとカナダ。そして、出会った人たち。
さようなら。

そして、その一時間後。
『機内で水道トラブルが発生しました』とのアナウンスが流れ、私たちはまたニューアーク・リバティ空港に逆戻りする。

おわり。

参考文献

1 上田敏／大川弥生編（１９９６）「リハビリテーション医学大辞典」医歯薬出版株式会社

2 日本理学療法士協会（２０１６）http://www.japanpt.or.jp/aboutpt/physicaltherapist/index.html ２０１５年１１月アクセス

3 IPSA（２０１６）http://www.surrogatetherapy.org ２０１６年４月アクセス

4 W・Hマスターズ／V・Eジョンソン（１９６６）「人間の性反応」池田書店

5 シェリル・T・コーエン-グリーン／ローナ・ガラーノ／柿沼瑛子翻訳（２０１４）「性の悩み、セックスで解決します。～９００人に希望を与えた性治療士の手記～」イースト・プレス

6 Sex Ability http://sexability.org （２０１５年１２月アクセス）

7 堤未果（２０１４）「沈みゆく大国アメリカ」集英社新書

8 堤未果（２０１５）「沈みゆく大国アメリカ〈逃げ切れ！日本の医療〉」集英社新書

9 トロント交通 https://www.ttc.ca/WheelTrans/index.jsp

10 トロント交通局 バリアフリーバス https://www.youtube.com/watch?v=l8f-Qw-rgKE&feature=youtu.be

11 トロント交通局 ACAT アドバイザー https://www.ttc.ca/About_the_TTC/ACAT_Reports_and_Information/ACAT%20Members.jsp

12 トロント市 バリアフリーガイドライン http://www1.toronto.ca/wps/portal/contentonly?vgnextoid=79a62d36cd049310VgnVCM1000003dd60f89RCRD

13 Come as you are co-operative http://www.comeasyouare.com

14 Kaufman, M., Silverberg, C., & Odette, F. (2007). *The ultimate guide to sex and disability: For all of us who live with disabilities, chronic pain, and illness*. Cleis Press.

15 Danielle Sheypuk https://daniellesheypuk.com

16　TED Talk https://www.youtube.com/watch?v=7PwvGfs6Pok

注釈

1　自助具　障害者の日常における動作を行いやすくするための補助具。

2　ＩＣＦ（国際生活機能分類：International Classification of Functioning, Disability and Health）

3　情意領域

4　ターミネーター走り　映画「ターミネーター２」で、Ｔ－１０００がショーン・コナーを追いかけるときの走り方